

接頭辞「不(ブ)」「無(ブ)」をめぐって

丹保健一*・倪永明**

On Japanese Prefix “不(bu)” and “無(bu)”

Ken-ichi TANBO and Yongming Ni

キーワード

不(ブ)、無(ブ)、和製漢語

1. はじめに

先に、丹保・倪(2000)において、接頭辞「不(ブ)」「無(ブ)」の交替を許す語をめぐって次のような指摘をした。

- (1) 「無(ブ)」「不(ブ)」の交替を許す語(『大辞林』の見出し語 20)は総て和製漢語(結びつき、意味が共に中国語と異なるものをこう呼ぶことにする)又は混交漢語(語の結合は中国でも見られるが意味が中国語と異なるものを仮にこう呼ぶことにする)であり、中国語と形・意味とも同じである漢語(以下、純漢語と呼ぶ)は「無道」一語を除いて見られない。
- (2) 「不(ブ)～」の語形を持つ語(『大辞林』の見出し語 35)は総て和製漢語又は混交漢語であり、形・意味共に中国語と同じであるものは見られない。
- (3) 「無(ム)」は、「有」に対する「無」であり、「無人」の「無」のように「結合相手」が「無」いことを意味するのに対し、「無(ブ)」は「無い」以上の意味・イメージが付け加わる例、例えば「無(ブ)作法」「無(ブ)躰」が見られる。もちろん「無異」、「無事」などのように何らかの特別なイメージが感じられないものもある。
- (4) 「不」が「ブ」と読まれるようになったのは、同じ接頭辞であり、意味上も共通性がある「無」が「ブ」と読まれることからの類推で、新しい語形(中国にはない語形)でかつ単に「無い」以上の意味(マイナスイメージ)を持つ語の場合に限って「ブ」と読んだのであろう。「無(ブ)～」が必ずしもマイナスイメージを持つとは限らないのに対し、「不(ブ)～」の全てがマイナスイメージを持つ(調査の範囲ではあるが)ことや、両形を持つ語には古くは「無(ブ)～」の語形が多いとの報告が傍証となろう。
- (5) そして、結果として「マイナス」のイメージが強い語に関して、「不(ブ)」「無(ブ)」の両者が使われるようになり、「無(ブ)」を意識せずに使われるようになった「不(ブ)」も現れるにいたったものと考えられる。

* 三重大学教育学部

** 江蘇理工大学人文学部

本稿では、上に挙げた(1)(2)(4)(5)について、とりわけ本来「ブ」の音を持たないと考えられる「不」が「ブ」と読まれている実態とその理由について、対象語形を『日本国語大辞典』にまでを広げ検討してみたい。

2. 接頭辞「不(ブ)～」「無(ブ)～」の語例

2-1. 「不」「無」を「ブ」と読ませるものは、辞書(『大辞林』)の見出し語によると次のようなものがある。(◎印は、無(ブ)不(ブ)の両形が見られるものを示す。)

(1) (「不(ブ)～」) 35例

◎ぶあんない【無案内・不案内】◎ぶき【不器・無器】◎ぶきっちょ【不器用・無器用】
◎ぶきみ【不気味・無気味】◎ぶきょう【不興・無興】◎ぶきょう【不器用・無器用】
◎ぶきりょう【不器量・無器量】◎ぶこう【無功・不功】◎ぶさた【無沙汰・不沙汰】
◎ぶさほう【無作法・不作法】◎ぶざま【無様・不様】◎ぶしょう【不精・無精】
◎ぶすい【無粋・不粋】◎ぶせい【不精・無精】◎ぶたしなみ【不嗜み・無嗜み】
◎ぶちょうほう【不調法・無調法】◎ぶどう【無道・不道】◎ぶねん【無念・不念】
◎ぶふうりゅう【無風流・不風流】◎ぶようじん【不用心・無用心】
○ぶいき【不意気・不粋】○ぶかっこう【不恰好・不恰好】○ぶさいく【不細工】
○ぶしゃれ【不洒落】○ぶしゃ・れる【不洒落る】○ぶしゅうぎ【不祝儀】
○ぶしょうごま【不精独楽】○ぶしょうひげ【不精髭】○ぶしょうもの【不精者】
○ぶしんじゅう【不心中】○ぶすき【不好き】○ぶなり【不形】○ぶはむき【不はむき】
○ぶへんじ【不返事】○ぶま【不間】

(2) (「無(ブ)～」) 57例

◎ぶあんない【無案内・不案内】◎ぶき【不器・無器】◎ぶきっちょ【不器用・無器用】
◎ぶきみ【不気味・無気味】◎ぶきょう【不興・無興】◎ぶきょう【不器用・無器用】
◎ぶきりょう【不器量・無器量】◎ぶこう【無功・不功】◎ぶさた【無沙汰・不沙汰】
◎ぶさほう【無作法・不作法】◎ぶざま【無様・不様】◎ぶしょう【不精・無精】
◎ぶすい【無粋・不粋】◎ぶせい【不精・無精】◎ぶたしなみ【不嗜み・無嗜み】
◎ぶちょうほう【不調法・無調法】◎ぶどう【無道・不道】◎ぶねん【無念・不念】
◎ぶふうりゅう【無風流・不風流】◎ぶようじん【不用心・無用心】
○ぶあい【無愛】○ぶあいきょう【無愛嬌・無愛敬】○ぶあいそう【無愛想】
○ぶい【無為】○ぶい【無異】○ぶいん【無音】○ぶえき【無射】○ぶえん【無塩】
○ぶえんりょ【無遠慮】○ぶけんぼう【無憲法】○ぶこつ【無骨・武骨】
○ぶさい【無菜】○ぶじ【無事】○ぶしお【無潮】○ぶしつけ【無躰・無仕付】
○ぶぜい【無勢】○ぶそう【無双】○ぶていしゅ【無亭主】○ぶどうじん【無道人】
○ぶなん【無難】○ぶにん【無人】○ぶらい【無頼】○ぶらいかん【無頼漢】
○ぶらいは【無頼派】○ぶりょう【無聊】○ぶれい【無礼】○ぶれいこう【無礼講】

(3) (「無(ブ)～」 「不(ブ)～」 共用語形) 20例

◎ぶあんない【無案内・不案内】◎ぶき【不器・無器】◎ぶきっちょ【不器用・無器用】
◎ぶきみ【不気味・無気味】◎ぶきょう【不興・無興】◎ぶきょう【不器用・無器用】
◎ぶきりょう【不器量・無器量】◎ぶこう【無功・不功】◎ぶさた【無沙汰・下沙汰】

接頭辞「不(ブ)」「無(ブ)」をめぐって

- ◎ぶさほう【無作法・不作法】◎ぶざま【無様・不様】◎ぶしょう【不精・無精】
 ◎ぶすい【無粹・不粹】◎ぶせい【不精・不精】◎ぶたしなみ【不嗜み・無嗜み】
 ◎ぶちょうほう【不調法・無調法】◎ぶどう【無道・不道】◎ぶねん【無念・不念】
 ◎ぶふうりゅう【無風流・不風流】◎ぶようじん【不用心・無用心】

2-2. 上に挙げた語の語種的特徴は次の表1～3に示すとおりである。

表1. 「不(ブ)～」「無(ブ)」共用語形を除く)15例

- *「大詞典」「大漢和」は各々『漢語大詞典』、『大漢和辞典』を指す。(以下同)
 *表中の「中」「中和」「和」「×」は、各々、「元来の中国語にあるもの(連語をも含む)」、「意味が変わっているもの」、「日本語(和製漢語)とされているもの(大漢和辞典のみ)」、「中国語としては見られないもの」であることを示す。(表2、表3も同じ)

表1.

読み・表記	大詞典	大漢和
ぶいき【不意気・不粹】	×	和
ぶかっこう【不恰好・不格好】	中和	和
ぶさいく【不細工】	×	×
ぶしゃれ【不洒落】	×	×
ぶしゃ・れる【不洒落る】	×	×
ぶしゅうぎ【不祝儀】	×	×
ぶしょうごま【不精独楽】	×	×
ぶしょうひげ【不精髭】	×	×
ぶしょうもの【不精者】	×	×
ぶしんじゅう【不心中】	×	×
ぶすき【不好き】	×	×
ぶなり【不形】	中和	×
ぶはむき【不はむき】	×	×
ぶへんじ【不返事】	×	×
ぶま【不間】	×	×

注；「不格好」の語形は中国語には見られない。

表2. 「無(ブ)～」「不(ブ)」「無(ブ)」共用語形を除く)27例

読み・表記	大詞典	大漢和
ぶあい【無愛】	×	×
ぶあいきょう【無愛嬌・無愛敬】	×	×
ぶあいそう【無愛想】	×	和漢
ぶい【無為】	純漢	純漢
ぶい【無異】	混交	混交
ぶいん【無音】	×	混交
ぶえき【無射】	純漢	純漢

読み・表記	大詞典	大漢和
ぶえん【無塩】	純漢	純漢
ぶえんりょ【無遠慮】	×	×
ぶけんぼう【無憲法】	×	×
ぶこつ【無骨・武骨】	混交	混交
ぶさい【無菜】	×	和漢
ぶじ【無事】	純漢	純漢
ぶしお【無潮】	×	×
ぶしつけ【無躰・無仕付】	×	×
ぶぜい【無勢】	混交	混交
ぶそう【無双】	純漢	×
ぶていしゅ【無亭主】	×	×
ぶどうじん【無道人】	×	和漢
ぶなん【無難】	混交	混交
ぶにん【無人】	純漢	純漢
ぶらい【無頼】	純漢	純漢
ぶらいかん【無頼漢】	純漢	和漢
ぶらいは【無頼派】	×	×
ぶりょう【無聊】	純漢	×
ぶれい【無礼】	純漢	純漢
ぶれいこう【無礼講】	×	和漢

表3. 「無(ブ)～」「不(フ)～」共用語形20例

読み・表記	大詞典	大漢和
ぶあんない【無案内 ・不案内】	×	×
ぶき【不器 ・無器】	中和	中和
ぶきっちょ【不器用 ・無器用】	×	和
ぶきみ【不気味 ・無気味】	×	和
ぶきょう【不興 ・無興】	中和	中和
ぶきょう【不器用 ・無器用】	×	和
ぶきりょう【不器量 ・無器量】	×	和
ぶこう【無功】	中和	中和

接頭辞「不（ブ）」「無（ブ）」をめぐって

読み・表記	大詞典	大漢和
・不功】	中和	×
ぶさた【無沙汰	×	和
・不沙汰】	×	×
ぶさほう【無作法	×	×
・不作法】	×	和
ぶざま【無様	×	×
・不様】	×	×
ぶしょう【不精	中和	×
・無精】	×	和
ぶすい【無粋	×	和
・不粋】	×	和
ぶせい【不精	中和	中和
・無精】	×	×
ぶたしなみ【不嗜み	×	×
・無嗜み】	×	×
ぶちょうほう【不調法	×	和
・無調法	×	×
ぶどう【無道	中	中
・不道】	中和	×
ぶねん【無念	中和	中和
・不念】	×	×
ぶふうりゅう【無風流	×	和
・不風流】	×	中和
ぶようじん【不用心	×	中和
・無用心】	×	×

2-3. 『日本国語大辞典』に見られる語例（見出し項目以外からも採集、『大辞林』収録語形は除く。）^{注①②}

(1) 「不（ブ）～」34例

- ぶあいくち【不合口、不相口】；仲がよくないこと
- ぶあいさつ【不挨拶】；挨拶が丁寧でないこと
- ぶあしらい【不愛拶】；もてなしが悪いこと
- ◎ぶがく【不学・無学】；学問がないこと
- ぶかくご【不覚悟】；卑怯なこと
- ぶかんきん【不換金】；風邪薬の名前
- ぶかんにん【不堪忍】；我慢できないこと、忍耐強くないこと
- ぶかんのう【不堪能】；下手なこと
- ぶきげん【不機嫌】；機嫌が悪いこと

- ぶきだい【不生鯛】；塩をふり、一晩おいて翌日食する鯛
 - ◎ぶぎょうぎ【不行儀・無行儀】；行儀が悪いこと
 - ぶぎり【不義理】；義理を欠くこと
 - ◎ぶけい【不稽・無稽】；でたらめ
 - ぶげい【不芸】；芸に熟達していないこと
 - ぶざい【不才・不材】；才のないこと。役に立たないこと
 - ぶさいく【不作為】；気がきかないこと、工夫がないこと
 - ぶさよじき【不作余食】；(仏語)非常に食べることを、定められた時に食べないこと。
 - ぶさん【不算】；計算が得意でない
 - ぶしあわせ【不仕合・無仕合】；ふしあわせ
 - ◎ぶしあん【不思議・無思案】；思慮がないこと、分別がないこと
 - ぶしゅび【不首尾】；首尾の悪いこと、不成功、不都合
 - ぶしょたい【不世帯】；家事の切り回しが下手なこと
 - ぶそうおう【不相応】；ふつりあい
 - ぶたっしゃ【不達者】；達者でないこと、又はその人
 - ◎ぶちそう【不馳走・無馳走】；馳走のないこと
 - ぶちょうし【不調子】；調子のはずれていること
 - ぶにんじょう【不人情】；人情のないこと
 - ◎ぶにんそう【不人相・無人相】；人相のよくないこと
 - ◎ぶびょうし【不拍子・無拍子】；拍子があわないこと、拍子はずれ
 - ◎ぶふうか【不風雅・無風雅】；風雅でないこと
 - ぶほうこう【不奉公】；主人に忠実でないこと、まじめに主人に仕えないこと
 - ぶやくそく【不約束】；約束を守らないこと
 - ◎ぶようじょう【不養生・無養生】；養生をしないこと、健康に気をつけないこと
 - ぶらい【不礼】；無礼(ぶれい)と同じ
- (2) 「無(ブ～)」27例
- ぶおとこ【無男】；みにくい男
 - ◎ぶがく【不学・無学】；学問がないこと
 - ぶきゅう【無窮】；果てしないこと
 - ◎ぶぎょうぎ【不行儀・無行儀】；行儀が悪いこと
 - ぶきょく【無曲】；太刀さばきの一つ
 - ◎ぶけい【不稽・無稽】；でたらめ
 - ぶこうこう【無孝行】；孝行でないこと
 - ぶこころえ【無心得】；心得のよくないこと
 - ぶさ【無沙】；無沙汰
 - ぶさく【無作】；技量がないこと。無骨であること。
 - ぶじ【無似】；(賢人に似ていない)愚かである
 - ◎ぶしあわせ【不仕合・無仕合】；ふしあわせ
 - ◎ぶしあん【不思議・無思案】；思慮がないこと、分別がないこと
 - ぶじょう【無状】；無礼な言動

接頭辞「不(ブ)」「無(ブ)」をめぐって

- ぶしりょ【無思慮】；思慮のないこと
 - ぶぜんせい【無全盛】；盛んでないこと
 - ◎ぶちそう【不馳走・無馳走】；馳走のないこと
 - ぶちよう【無調】；ととのわないこと
 - ぶにんずう【無人数】；(無人と同じ)
 - ◎ぶにんそう【不人相・無人相】；人相のよくないこと
 - ぶにんまえ【無人前】；一人前でないこと
 - ぶばい【無媒】；人里離れたさびしい所
 - ◎ぶびょうし【不拍子・無拍子】；拍子があわないこと、拍子はずれ
 - ◎ぶふうか【不風雅・無風雅】；風雅でないこと
 - ◎ぶようじょう【不養生・無養生】；養生をしないこと、健康に気をつけないこと
 - ぶりょ【無慮】；(無慮(むりょ)と同じ)
 - ぶろくしき【無六識】；(六識の六番目)意識がないこと
- (3) 「無(ブ)～」 「不(ブ)～」 共用語形 10 例
- ◎ぶがく【不学・無学】；学問がないこと
 - ◎ぶぎょうぎ【不行儀・無行儀】；行儀が悪いこと
 - ◎ぶけい【不稽・無稽】；でたらめ
 - ◎ぶしあわせ【不仕合・無仕合】；ふしあわせ
 - ◎ぶしあん【不思議・無思案】；思慮がないこと、分別がないこと
 - ◎ぶちそう【不馳走・無馳走】；馳走のないこと
 - ◎ぶにんそう【不人相・無人相】；人相のよくないこと
 - ◎ぶびょうし【不拍子・無拍子】；拍子があわないこと、拍子はずれ
 - ◎ぶふうか【不風雅・無風雅】；風雅でないこと
 - ◎ぶようじょう【不養生・無養生】；養生をしないこと、健康に気をつけないこと

3. 「不(ブ)～」をめぐって

- (1) 「不(ブ)～」の語形を持つ語を見ると、『大辞林』『日本国語大辞典』から抜き出した語例を見る限りにおいては、『不換金』『不生鯛』など、名称を表す場合を除いて総てマイナスイメージを伴う。
- (2) また、「不(ブ)～」の語種性を見ると、『大辞林』『日本国語大辞典』からの語例においては、純粋漢語の割合は少ない。しかし、純粋漢語(中国語に同じ語形・語義がみられるもの)である例も相当数見られる。「不学」「不稽」「不調和」「不体裁」「不養生」などがそれである。これらの語の殆どが、「無(ブ)～」と共用されるものであるとはいえ、「無(ブ)～」との共用例でないもの(「不才」「不首尾」)も見られる。
- (3) 接頭辞「不(ブ)～」に関するこのような現象は、丹保・倪(2000)でも指摘したことであるが、同じ接頭語辞であり、意味上も共通性がある「無」が「ブ」と読まれることからの類推で、新しい語形(意味が異なる場合も含む)でかつマイナスイメージを持つ語の場合に限って「ブ」と読んだのであろう。「無(ブ)～」が必ずしもマイナスイメージを持つとは限らないのに対し、「不(ブ)～」の全てがマイナスイメージを持つ(調査の範

困ではあるが) ことや、両形を持つ語には古くは「無(ブ)～」の語形が多いとの報告が傍証となろう。

しかし、中国語に同形同意の語があるにも関わらず、「不(ブ)～」があることはどのように考えればよいのであろうか。

これについても、丹保・倪(2000)において、次のような指摘をした。

「そして、結果として『マイナス』のイメージが強い語に関して、『不(ブ)』『無(ブ)』の両者が使われるようになり、現在では『無(ブ)』を意識せずに使われるものも見られるようになってきている。」

つまり、いつの頃からか(おそくとも近世前期あたりころからか)、「あることが不足する、あるいは無い」場合にマイナスイメージを伴う事柄に対して、接頭辞「不(ブ)」「無(ブ)」を冠し、「不(ブ)～」「無(ブ)～」と表すようになり、その際、実際に中国語(漢語)に存在したにもかかわらず、それを意識せずに行われたことも多かったのではあるまいか。

「不(ブ)～」の共用語形である「無(ブ)～」が見られない語例については、単に辞書に掲載されなかつただけで実際は用いられていたとも、また、その語の語彙的特徴、発音のしやすさ、同語形・同音語形の存在、などが関わって使用されなかつたとも考えられる。

4. おわりに

最初から共用語形「無(ブ)～」を持たない「不(ブ)～」があったのか、最初は両形があって一方が用いられなくなったのか、そうだとすればその理由は何か等についても興味深いものがあるが、現時点では未調査である。

共用される「不(ブ)～」と「無(ブ)～」の出現頻度の違い^(註)やマイナスイメージを伴う語であっても、「不議」「不吉」「不正」「無慈悲」「無節操」など「不(フ)～」「無(ム)～」にとどまっている語については、発音のしやすさ、同語形・音の存在、語彙的特徴などがかわっているものと思われるが現時点ではそれに詳しく言及する十分な用意がない。

【注】

- (1) 『大辞典』より(『大辞林』『日本国語大辞典』に見あたらないもの)

「無愛(ぶあい)」「無相言(ぶあしらい)」「無異(ぶい)」「無益(ぶえき)」「無男(ぶおとこ)」cf. (「醜男(ぶおとこ)」「無雅(ぶが)」cf. (「不雅(ぶが)」「無勘(ぶかん)」cf. (「不感(ぶかん)」「不堪(ぶかん)」「無几帳(ぶきちょう)」「無昨(ぶさく)」「不算(ぶさん)」「無似(ぶじ)」「無性(ぶしょう)」「不性(ぶしょう)」「不当(ぶとう)」「無人相(ぶんにそう)」「不人前(ぶんにまえ)」「不奉公(ぶほうこう)」「無慮(ぶりょ)」cf. (「無慮(むりょ)」)

- (2) 『角川古語大辞典』より(『大辞林』『日本国語大辞典』『大辞典』に見あたらないもの)

ぶさんよう(無算用)ぶしょぞん(無所存・不所存)ぶしょぞんにん(無所存人・不所存人)ぶしょぞんもの(無所存者・不所存者)ぶじん(無人)ぶどうけ(不道化)ぶたご(無単袴)ぶたのもし(無頼)ぶたのもしい(無頼)ぶちょうれん(無調練)ぶめいし(無名氏・亡名氏)ぶよう(無用・不用)

- (3)-1. 「新潮文庫の百冊」による出現頻度(『大辞林』の項目にあるもの。一部略)

無案内:0 不案内:10 無器用:17 不器用:82 無器量:0 不器量:18 不気味:141 無気味:70 無

接頭辞「不(ブ)」「無(ブ)」をめぐって

興：0 不興：18 無沙汰：49 下沙汰：5 不作法：21 無作法：49 無粋：4 不粋：5 無精：23 不精：28 無調法：0 不調法：9 不道：18 無道：3 不念：0 無念：44 無風流：0 不風流：4 無様：1 不様：5 無用心：4 不用心：7

(3)-2. 「明治の文豪」による出現頻度(『大辞林』の項目にあるもの。一部略)

無案内：0 不案内：9 不器用：21 無器用：8 無器量：0 不器量：12 無気味：13 不気味：9 無興：0 不興：6 不功：0 無功：1 不沙汰：7 無沙汰：86 不作法：15 無作法：16 不粋：0 無粋：1 無精：19 不精：26 無調法：0 不調法：9 無道：0 不道：9 不念：0 無念：49 不風流：3 無風流：6 不用心：10 無用心：3

【引用・参考文献】

- (1) 野村雅昭(1973)「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」(『ことばの研究』第4集)
- (2) 須山名保子(1974)「接辞「不」「無」をめぐって」(『学習院国語国文学会誌』17)
- (3) 相原林司(1980)「接辞「不」「無」の使い分けに関する考察」(『外国人と日本語』5)
- (4) サトー・アメリカほか(1982)「語頭の位置にある否定的な意味を持つ造語要素「無不非未」の意味と使われ方」(『日本語と日本文学』2)
- (5) 奥野浩子(1985)「否定接頭辞の『無・不・非』の用法についての一考察」(『言語』14-6)
- (6) 吉村弓子(1990)「造語成分「不・無・非」」(『日本語学』9-12)
- (7) 佐藤喜代治(1979)『日本の漢字』角川書店
- (8) 丹保健一・倪永明(2000)「接頭辞「不(ブ)」「無(ブ)」の交替を許す語をめぐって」(『国語文字史の研究五』)和泉書院

【引用・参考辞書】

- 1 『広辞苑 第一版』 新村出編 岩波書店 1955年
『広辞苑 第二版』 新村出編 岩波書店 1969年
『広辞苑 第三版』 新村出編 岩波書店 1983年
『広辞苑 第四版』 新村出編 岩波書店 1991年
『広辞苑 第五版』 新村出編 岩波書店 1998年
- 2 『学研国語大辞典 第二版』 金田一春彦 池田弥三郎編 学習研究社 1985年
- 3 『大辞林』松村明 三省堂編修所編 三省堂 1989年
- 4 『大辞泉』松村明監修 小学館 1995年
- 5 『日本国語大辞典』日本大辞典刊行会 小学館 1976年
- 6 『岩波漢語辞典』山口・竹田編 岩波書店 1987年
- 7 『大漢和辞典』諸橋徹次著 大修館書店 1960年
- 8 『廣漢和辞典』諸橋他著 大修館書店 1982年
- 9 『漢語大詞典』漢語大詞典編輯委員會 上海辞書出版社 1986年

【用例調査資料】

- 『CDROM版 新潮文庫の百冊』新潮社(1995)
『CDROM版 大正の文豪』新潮社(1997)
『CDROM版 明治の文豪』新潮社(1997)